



No.41

[平成24年5月22日]

岡山県総合教育センター

〒716-1241

加賀郡吉備中央町吉川 7545-11

TEL(代) (0866)56-9101

(特別支援教育部) (0866)56-9106

〈特別支援教育部相談専用電話〉

TEL (0866)56-9117

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

特別支援学校教員の専門性について考える

特別支援学校教員の専門性に関する三つの階層

特別支援学校教員の専門性の向上については、平成19年度に文部科学省から出された「特別支援教育の推進について(通知)」や「岡山県特別支援教育推進プラン」で取り上げられており、障害が重度、多様化する中で、それに対応する教員の資質・能力を高めていくことは喫緊の課題と言えます。

それでは、特別支援学校教員に必要とされる専門性とは何かということですが、このことについて、平成22年3月に国立特別支援教育総合研究所から出された、「肢体不自由のある子どもの教育における教員の専門性向上に関する研究」で、肢体不自由教育に特化した形ではありますが、教員の専門性について具体的に述べています。この研究では、特別支援学校教員が身に付けておくべき専門性を三つの階層に分け、内容を具体化し、図式化して提示しています。まず、下段の第1階層は「教科の専門性」、「教育課程の実行」、「生徒指導の基礎基本」、「学級経営」等の教師として基盤となる専門性、中段の第2の階層は「障害に関する知識」、「実態把握の力」、「課題設定の力」、「授業展開力」等の特別支援教育にかかわる教員の専門性、上段の第3の階層は「姿勢や体の動きの指導」、「摂食指導」、「情報手段の活用」等の肢体不自由教育にかかわる専門性の向上について取り上げています。

特別支援学校教員の専門性という、私たちは、ともすると第2や第3の階層のみに意識が行き、第1の階層に目を向けることが少ないように思われます。授業を参観し、「この授業は教師も子どもたちも授業に入り込んでいるな」と感じる、いわばピカッと光る授業は、表面的な支援ができていのかどうかというものではなく、何を教えていきたいのかという目的が明確に示されたものであったように思います。授業が終わった後、授業を行った先生方とお話してみると、先生方に共通して言えることは、障害種に対応した教育及び特別支援教育にかかわる専門性の高さだけでなく、教育課程の理解、教科の具体的な指導内容の理解など、第1の階層で示す教師の基盤となる専門性をしっかりと持たれた先生だということが分かりました。つまり、教育課程や授業論、教科の専門性など授業の本質が特別支援学校教員の専門性にも大きな影響を与えているということです。

専門性は知識止まりでなく授業に生かされてこそ

教師の専門性を高めていくためには、前述のとおり三つの階層の知識・技能を身に付けていくこととなりますが、それでは知識・技能が身に付いたことで専門性が高まったと言えるのでしょうか？私は、そのことだけをもって専門性が身に付いたとは言えないのではないのかと思っています。

例えば、ある先生は当総合教育センターの研修講座や地域で開催される研修会、学習会に参加され、研修に非常に熱心に取り組まれていたとします。そして、その結果、多くの知識や技能を身に付けられたとします。しかし、授業を見てみると、子どもたちの実態や特性に配慮した指導がまったくできておらず、授業が始まっても、子どもたちは自由に教室中を動き回っているという現

実があったとします。この状況は、もしかすると先生が研修会等で身に付けられた知識・技能が授業の中に生かされていないということかもしれません。私は、教師の専門性が身に付いた、高まったとは、知識や技能を学級経営や授業の中に生かすことができているかどうかということが、一つの基準になるのではないのかと思っています。知識・技能を理解の段階に止めるのではなく、それを使いこなしていくことができるという、行動レベルにまで落とし込んでいく必要があると考えています。行動レベルまで落とし込んでいくことができこそ、専門性が身に付いた、高まったと言えるのではないのでしょうか。

このことについて、特別支援教育つうしんNo.35号「特別支援教育における専門性を育てる～学んだ知識を授業に生かす～」(平成22年5月21日)では、正しい知識を身に付ける段階を第1ステージ、身に付けた力を授業に生かす段階を第2ステージとして位置づけて、第2ステージの重要性を記していますので参考にしてください。ところで、教育関係者ではありませんが、心臓手術で有名な順天堂大学の心臓外科医天野篤氏がある対談の中で、「専門性を高めていくために知識を溜めることが大切である。しかし、若者は溜めた知識の出し方を知らないだけである。」という趣旨のことを話されていました。溜めた知識をどの場ですすのかというと、医療で言えば手術であり、教育に置き換えて考えるなら授業だと言えます。(ベストケア東京ドクターズインタビューより)

研修で学んだ知識・技能を授業にどのように生かすのか

それでは、研修等で学んだ力を授業の中にどのように出していく(生かしていく)のかということですが、いきなり授業へと考えず、まず第一に研修で学んだことを人に伝えることから始めてみたらどうでしょうか。人に伝えるということは、学んだことを想起することで学習の反復を行うこととなります。そして、研修した内容を整理して資料にまとめると、さらに学んだ内容を自分自身の中に定着化させていくことができます。人に話す機会は、学部の研修報告会、学年会、グループ会など色々と考えられます。ぜひ、自分の力にしていくためにも周りの人たちに伝えてみてください。伝えられた先生方も、もしかしたら新たな気付きがあるかもしれません。人に伝えることは、授業に生かすための第一ステップなのかもしれません。

第2は、研修した内容と自分の授業を対比させて考えるという習慣を持つということです。そもそも研修は、自分の学級経営や授業を改善していくために、より幅の広い、そしてより質の高い知識・技能を身に付けたいという、個々の主体的な動機が基盤になっていると思います。ですから、研修後、研修で学んだ知識・技能を学級経営や授業と対比させ、「自分の学級経営では」「自分の授業では」という視点で、一つ一つ点検をしていくことが非常に大切です。その一つの方法として、指導案を書くということが上げられます。研修で学んだ知識や技能をベースに指導案を書いてみると、今までにない目標設定や具体的な支援などが浮かび、授業改善に直接結びついていくことがあります。このように、授業レベル(行動レベル)に学んだ力を落とし込んでいくことが専門性を高めていく上で非常に大切になります。要は、研修をしっぱなしにしないということです。研修を通して新たな気付きを得て、「分かった」という実感が持てたということは大切ですが、それだけに止まっていたのでは、単なる知識・技能を得たという段階に止まります。学級経営や授業という枠組みの中で、丁寧に振り返りを行っていくことにより、実際の教育活動に生きる知識・技能の段階へと高まっていくのではないのでしょうか。

専門性の向上は、学級経営、授業における自分自身の課題を明確に自覚することから始まります。そして、学級経営、授業と研修を関連づけながら、常に向上心を持って改善を行っていくことです。このような、繰り返しと積み上げの中で専門性は高まっていくのだと思います。

これから、校内での研修、総合教育センターでの研修など、数多くの研修が計画をされていますが、自らの課題と関連づけながら意欲を持って取り組んでいただければと思います。

(特別支援教育部 高橋章二)